

蛭田敬子の一生懸命は七難かくす ～ ゆずりはの木 ～

真夏の強い日差しが嘘のように感じられない、京都高尾の神護寺に向かう道。大きな木々の間を私は友人と2人で歩いた。平日ということもあり、人影はほとんどない。どこからか川のせせらぎが聞こえ、新緑の臭いがたちこめる。樹齢何百年もありそうな木立。私はそっと木の幹をなでた。「暴風雨や雷、虫などにも静かに耐えて生きてきたんですね。バカな人間の姿もたくさん見てきたでしょう。これからも見守っていてください。また会いに来ますから」数本の木をなでながら、心の中でつぶやいた。木にくらべれば、人間なんて一瞬を生きるだけの存在。木から人間を見たらどう見えるのだろう。落ち葉のつもった地面は歩くとばさばさと音がした。

私の娘が小学校6年生の頃、学校から「ゆずりはの木」という文章をもらって帰ってきた。一度読んだだけなのではっきりとは覚えていないが、子供たちよ、心配することはない。何もほしがらなくても、親たちは、おまえたちにすべての物を譲って死んでいくのだよ。みたいな文章だったと思う。

古い葉は一生懸命生き、新しい葉にすべてを譲って死んでいく。そして腐って栄養になりまた新しい葉が生まれる。

人間も同じなのだと感じた。一生懸命、働き次の世代にすべてをゆだねて死んでいく。人は年取って死んでいけるからいいのだ。もし、死ぬことがなければ他の人に譲らず、自分だけで知識も財産もずっと持ち続けるだろう。若い頃の私は、人が恐かった。いつも母親の後ろにくっついていて、人のおかげで、生きられているなど考えたこともなかった。

私は、商業高校を出ると大阪の梅田で事務員として働いた。入社動機はただ、姉が、「梅田が便利だ」といったからだ。他に何も考えていない。会社で仕事を頼まれると、小心な私は、何でも早くしないといけないと思い、あせって失敗ばかりしていた。上司は六十二、三歳ぐらいの男性。小柄で痩せていて目だけが鋭く、声が大きい。結婚されてはいるが、子供さんはいない。とても厳格で几帳面だ。書類の作成では、綴じしろが数ミリたらないと、何回も何回も作り直しを命じる。私の席の後ろを歩く時は、いつも何も言わず私の机に置いてある鉛筆や尺などを、まっすぐに直して立ち去る。私は「なんと神経質な人だろう。こんな細かいことまで」とよく思ったものだ。

ある日、更衣室で帰る身支度をしていると、「忘れ物」と上司の呼ぶ声がする。急いで席に戻ると、机の上に小さなゼムクリップがたった一つ、ポツンと残っていた。何も残して帰るな、と言いたかったのだ。学校を出たての私には、その上司は神経質でただ、口うるさく怖いだけの存在だ。その厳しさが私を思って、躑をしてくれる為だとは夢にも思わない。

二年ほどして、私は総務の女性が妊娠して退職したので、その後任として総務部に移動した。新しい上司は、とてもにこやかな五十代の男性。私を叱りもしないし、かばうこともない。私はただ決められたことだけを、マイペースに淡々としていた。

そんなある日、父が倒れて病院に運ばれたと会社に電話が入ったので、私は急いで帰った。父の病室は病院の2階、看護師詰め所の隣で6畳ほどの個室。父は脳溢血で倒れ意識不明だった。いつ何があってもおかしくはない。その日から私は母と2人、病院で添いを

はじめた。鼻をつくような消毒の臭いが部屋中にして、父の大きないびきの音だけがガー、ガーと響く。時折、ドア越しに廊下を忙しく歩く看護師の足音が聞える。

数日後、六十代のあの元上司が見舞いに来てくれた。父の寝ている姿を見ると、ドア近くに立ち止まり、顔を気の毒そうにゆがめた。自分とそんなに年の変わらない父の姿を見て、自分と重ねたのかもしれない。もうダメだろうと感じているのが伝わる。挨拶もそこそこに、お見舞い金を包んだ封筒をそっと母に渡すとすぐに帰った。

今思うと、私のようなドジな新入社員を教育するのは本当に、大変だっただろう。何度、いらだったことだろう。なのに、すぐにお見舞いに駆けつけてくれた。「鉄は熱いうちに打て」その上司がよく言っていたことばだ。若い私にはその優しさがわからず神経質で怖いだけの上司だった。

しかし、年を重ねるほどに、その上司のやさしさを知る。自分の人生で気づいてきた大切なことを、私に譲ってくれていたのだ。本当の優しさとは厳しさを伴うもの。甘やかすだけなら誰でもできる。私を自分の子供のように、大切に思うから叱ってくれていたのだ。ゆずり葉の木、わたしはいっぱい譲ってもらっていたのだ。

山道を歩いていると、遠くでゴロ、ゴロと雷の音がする。雨が降り出しそうだ。私は友人と急いで駐車場に向かった。車の中に乗り込むとすぐに、大粒の雨が勢よく降りだし空が時おりピカ、ピカと光る。私たちは急いで家に向かった。

そういえば、あのドキュメント番組で紹介されていた男性はどうなったんだろう。激しい雨を車の窓から見ながらふと思った。

サラリーマンが嫌で、35歳の男性が脱サラして花屋を経営したが失敗。沖縄から少し離れた無人島に住み着く。自分で畑など作って開拓して生きていこうと考えたようだ。持ち物はテントとインスタントラーメン、缶詰などの食料とマッチ、寝袋、スコップなど。電気も水道も話す相手もない生活。ときおり本土から人が船でやってくる。美しい海で魚を釣ったり、畑を耕したりして暮らしはじめた。しかし、せっかく作った畑が、台風ですべて流されたり、テントも強風で飛んでしまったり。もっていった食料も、すぐにそこをつく。私は、強風でも何人かで、テントを押さえればテントは飛ばなかったかもしれない。食料もみんな協力して捕まえたり、作ったりしたらもっと困らないのではないかと思った。彼の髪は伸び、着ていた服もすぐに薄汚れていった。彼は人付き合いが嫌で、人に命令もされず自由に生きたいと、そんな生活を選んだのだろう。

私は人間が1人で生きるということは、こういうことなのだと彼を見て思った。私たちは、本を読み、電気やガスを使い、タクシーにのり、掃除されたきれいなトイレを使っている。でもそれは、みんな人が働いてくれているから、手に入る。コンピューターを便利に使えるのも、先人の多くの知識がゆずられてきたから、出来きた。

私が、会社を経営し始めて気づいたことは、人の力を借していただけないと何もできないということだった。仕事をくださるのも人。分からないことを教えてくださるのも人。人の力を借りないで出来ることなど何もない。サラリーマンの時より頭を下げることが増えた。これは予想外のことだ。

人間付き合いは煩わしい。傷つく。私もそう感じていた1人だ。ある時、60歳の女性が「私は気を使うタイプで、いつも損ばかりしています」と私に言った。私も気を使うタ

イブの人間。だから、彼女の気持ちはよく解った。でも気を使うから、営業が出来たのではないか、会社も出来たのではないかと今は思う。人付き合いは煩わしい。でも人が協力しあうからピラミッドなどのすごい建物もできた。人、一人の力などたいしたことはない。もっと素直に、謙虚に、人をお願いしますと言える人間にならなければいけないと最近思う。

車が高槻のパーキングエリアにつくころには、雨は上がった。車から降りると友人は「雨の匂いがするね」と背伸びをする。雨の匂いね。なんてロマンチックな言葉なのだろうと思いながら、私も背伸びをした。二人でコーヒーを飲む。友人はおみやげ売り場へ私は、携帯電話でパソコンに届いているメールのチェック。

「私は24歳の女性です。あなたの本を読みました。仕事だけが人生でしょうか・・・」という文章が続く。

この女性に何と答えればいいのか。色々な人生があるから答えは一つではない。偉そうなことを言うつもりもない。でも、私たちは働いてくださる方のおかげで気持ちよく暮らしている。だから私もその人たちの為に働いてお礼がしたい。はたらくとは、はたの人が楽になること。それはとても、素敵なことではないだろうか。みんなが働かなければ、こんな豊かな生活はない。人は人のおかげで人らしく生きられている。

友人が笑顔で「お風呂にいれるといいらしい」とひのきを丸く切ったおみやげを、買ってきた。一つを私にくれる。そんな、なにげない優しさがとてもうれしい。人は自分1人の力では生きていない。人や木や虫やすべての物に生かされている。自分が生きている意味は、私には解らない。でも一生懸命生きて、すべてを譲って死んでいくそれだけでいいように思える。愛する者の幸せを祈って、どれほど多くの人たちが死んでいったことだろう。私もきっと愛する者の幸せを祈って死んでいく。生きている間は一生懸命、光合成をして死んだら腐って栄養になろう。すべてを譲って。